

月山有情

日本山岳会 No.7734 木村喜代志

山形県のほぼ中央部に出羽三山の主峰、月山がある。内陸に生まれ育ち、庄内に住むようになって、朝な夕なに眺め続けられる珍しい山である。見慣れているはずの月山だが、内陸と庄内からでは趣が随分異なり、山形側は丸みを帯びた穏やかな半月型で、夏まで白い山である。一方、庄内からは3月ともなると数本の横縞をもつ黒い火口壁を晒すようになる。

月山と並び鳥海山も庄内を代表する山である。庄内平野の南北に対峙する2つの高峰は、大地に横たわる牛の背のような姿と、日本海から天に向かってすっきりと聳える姿はまことに対照的である。ところが朝日連峰の主稜から遠望すると、一卵性双生児のように見えるから不思議である。さらに、双方とも古来より地元住民との関わりが深く、朝廷の尊崇も厚く天慶四年(941)に陸奥最高の従二位を揃っていただいている。そして、何よりも東北の山特有の温もりを醸し出す山肌をもっている。

もう大分前になってしまったが、東北の山を紹介した本に、「帰郷列車を待つ山なみ」という表現があった。月山には、四季を問わず私たちを包み込んでくれるおおらかさと、神の住むところとしての高貴さが漂っている。月山という呼称は、農業の神で知られる月読尊を祀ったことに由来しているといわれているが、遠望していると農事歴に出てくる月のような優しい山という感じを漂わせている。

月山山麓の雪は、結晶が触れ合いカサカサという音をたてながら降り積もる。青森の酸ヶ湯の積雪を凌ぐが、気象庁の観測地点がないので「隠れ積雪日本一」である。一方、山は荒れ狂う季節風が雪を吹きつけ、山肌を研ぎ、日増しに神々しさと重厚さを増していく。1月半ばを過ぎ、石跳川が雪に埋もれる頃からスキーで志津から湯殿山へ、あるいは、姥沢経由で姥ヶ岳へ、湯殿山スキー場から草光台経由で紫灯森へと、積雪の量に比例して行動範囲が広まっていく。

ブナの小枝に付着した霧氷が明るい陽光で音を立てて落ち始める頃、吹き渡る風にもひところの勢いがなくなり、春近しを教えてくれる。この頃になると、月山山頂からの千変万化の斜面を気ままに滑れるスキーの舞台となる。アルパインスキークラブの方が「東北の山は宝の山だ」と呼んだ。山頂から鍛冶小屋(現在は小屋跡)までは凹凸の激しい氷と岩が顔を出す斜面、牛首までは硬いエビの尻尾が連続する大きな斜面、その下方は粉雪の斜面へと変化する。そして夏山用リフトからはブナ林の中のふわふわ雪へと変化する。一方、山頂から北に向かうと、九合目、仏生池まではエビの尻尾の連続で、スキーはバネ仕掛けのように弾む。七合目までは堅く締まった雪、その先はブナ林に守られた粉雪が月の沢温泉、北月山荘まで続く。また、八合目の月山レストハウスから旧七合目経由で六合目へは鉋を掛けたような斜面が続く。そして、六合目の避難小屋でスキーが止まる。4月上旬、肘折温泉を目指して、ヘッドランプを頼りに姥沢を登り、ピリッとした寒さのなか7時に山頂に立った。立谷沢ま

での比高 1,000mのスキーは圧巻だった。念仏が原端に建つ避難小屋は、完全に雪埋まっていた。この先は登り下りを繰り返して、宿の庭先まで滑った。所要時間は 10 時間だった。また、山頂から南に滑り、国道 112 号の口ノ宮湯殿山神社を目指したときは、濃霧と風に邪魔されてヘッドランプ頼りのスキーになった。

貸切状態の月山も 4 月、スキー場がオープンすると行の山、浄の山とは無縁の喧騒ぶりが山々を支配し、神が戸惑い、苦笑いする季節を迎える。7 月 1 日の山開きを待って、白装束の行者の列が見られるようになる。出羽三山の登拝は、観音菩薩に現世利益を願う羽黒山に始まり、月山で阿弥陀の浄土を拝み、最後に湯殿山大日如来の宝前で即身仏を願うのが順路とされてきた。

今から 20 年ほど前、山頂から湯殿山神社に下る 3 人連れに出会った。60 歳過ぎの女性は金剛杖を持ち、白足袋に草鞋履きの行者姿であった。「左足をもう少し右に」、「はい、今度は鉄梯子だよ」と、ひっきりなしに声がかかった。今朝、山頂の小屋を出てきたというからもう 6 時間近く歩いたことになる。白足袋は、血に染まり、泥に汚れていた。最も足場の悪い旧火口壁の下り、月光坂にさしかかった時、彼女が全盲であることに気付いた。月山に限らず信仰の山には、信仰の厳しさや山の神の恐ろしさを引き立てる急坂、悪路などが設けられているのが常である。しかし、女行者は全神経を研ぎ澄まして足を前に進めている。相変わらず「もっと左」、「上に枝があるから気をつけて」と声がかかった。足取りはゆっくりながらも疲れた様子はなく、立ち止まるとの休息時には笑みを浮かべる余裕、いや充実感に満ち溢れていた。杖に伝わる感触で岩を知り、草鞋を通して雪解け水を感じ、水垢で滑る急坂を下りきり湯殿山神殿前で草鞋を脱いだ時のほっとした表情には、何の飾り気もなく喜びが全身に表れていた。そして、「聞かば語るな、語らば聞くな」の神殿に手を引かれていく白装束の後姿は、昼下がりの陽光を受けまぶしく輝いていた。

月山には、古来より山伏の聖地とされてきた東西二つの普陀落がある。数年前、霧の中を東普陀落に足を伸ばしたことがあった。剣が峰から急崖に飛び込むように降り、傾斜のなくなったところから灌木と草をかき分けて進むと巨岩が聳り立っている。この光景を「三山雅集」は、「補陀洛(落)の本尊は、弥陀、薬師、観音の三体なり、数十丈に聳えたる巉岩三つ並べり。是則三尊の妙形なり」と述べている。近づくとお香のかおりが漂っていた。大きく背後から回り込み、恐いもの見たさの格好で覗き込んだ。白装束の行者 2 人が大きく口を開いた岩の前、胎内くぐりの入口で手を合わせ読経の真っ最中だった。ときおり乳白色の霧が流れて来る。息を殺して眺め続けていたことを思い出す。

普陀落信仰は、浄土思想からきていると教えてもらった。那智山などでは西方海の彼方に極楽浄土があると信じられ、海に漕ぎ出て浄土を求めて止まなかったという。ここ出羽三山では、修験道の登り口の 1 つに立谷沢口がある。この沢はかつて砂金の産地として知られていたところで、修験者たちは砂金を求め奥へ奥へと進み、お浜池を海に見立て、その彼方に三宝荒神の奇異な岩峰を浄土と拝み、これぞ普陀落として信仰したのでは…といわれている

る。行者たちが去った後、巨岩を改めて見上げてみました。それは天に向かってそそり立つ男根のお化けであった。

もう1つの普陀落については、羽黒山中興の祖、天宥別当がつくったと伝えられている。「出羽三山の奥の院、湯殿山に万一の支障があったときには、西普陀落を開くように」といって残して、その場所に行く路を隠したと伝えられている。かれこれ半世紀前、当時の鍛冶小屋から雨告山に降り、西普陀落を目指したことがあった。場所は田麦川の水晶森鞍部に達する枝沢の会で、崩壊が著しく、所々に硫黄の鉱床が露出していた。その一ヶ所が特異な形状をしており、剥きだしの岩盤が湯殿山のご神体を一回り小さくしたような形をしていた。上方に錆付いた剣先が望見された。その左手中ほどから鉄分を含むと思われる水が岩肌を赤黒く染めながら噴流し、田麦川に流れ落ちていた。

帰路の田麦川遡行中に落差20㍍、幅5㍍ほどの勇壮な滝に出会う。右岸を高巻きして上に出たとき、かつて鎖か綱を掛けたと思われる朽ち果てた鉄の杭が岩の割れ目に打ち込まれていた。謎に満ちた修験道の成立には、陰陽道の影響が大きいと聞いたことがある。豊穰という自然界で最も基本的な性神信仰が、普陀落信仰にも歴然と残り、今日の月山で根強く息づいているのだろうか。

9月中旬ともなると、山頂付近は紅に燃え始め、かけ足で山腹を下りてくる。旧国道112号は上下左右紅葉に彩られる。ブナの落葉を踏みしめる音に耳を傾け山中に分け入ると、ナメコに出くわすのもこの頃だ。そして、雪の来た月山は、時空を越えて自然界への畏怖の念とともに、小さな興奮を呼び、再び白い山へと想いを馳せてくれる。

月山には独自の宗教と歴史がある。月山を凌ぐ伽藍や社殿をもつ所は各地にあると思う。しかし、壮大で厳粛な自然界を聖所として、連綿と人々の間に受け継がれ、生き続けている月山信仰は、東北人気質形成に大きな影響を与え続ける心の故郷的存在に思えてくる。

1987.2009.2020 加筆